〔幸庵夜話〕一予判を占ひ名乘字の善惡を考、其外家の住居々々の恰合により吉凶大戸口の建樣等、品々土御門兵部少輔家來に、花形六左衞門と申候てあり、昔予近付に成申候比、六十歳計に相みへ申候、此六左衞門右陰陽道に妙を得たるものにて候、若輩より勤仕して、よく習得たり、此六左衞門に傳授いたし候、然ども終に考ふる事もなく打過候、先年於護國寺住持の判をすへ爲見被申候處に、追付位進可被申候、但し先を折判形に候間、末は宜かる間敷候條、御愼可有之候と申候處に、護持院の住持職に被仰付、大僧正に被仰付候、夫より隱居、其上にも結構成樣子に候處に、當御代家宣公に成て、公儀表惡敷、逼塞一命を御助け置被遊迄之首尾に成候、亦護國寺の役者の內、普門院右住持大僧正に成申を見て、予を信仰にて判をして見せ申候、殊之外能判にて、寺領有之寺江居り可申と判申候へば、國は何方にて可有之と、狂言に尋申候故、則江戸の地にて候、此墨薄き點が當地と察申候、さあらば土地は一方に山、一方に海道を請て、片さがりなる土地にて候、前には流有て、後は地つまり可申候、青龍白虎朱雀玄武の理に叶ひ、四神相應の寺地に居はり可被申と判じ候へば、普門院喜悅之處、總出家中、先祝をいたし候へとて、吸物酒など、普門院に出させ、予も打まじり、なぐさみ申候、然處無程一位樣（○桂昌院、德川綱吉生母、）の御寺、日下窪の藥王寺後往に被仰付候、寺領武州六鄕にて百石御寄附、予が判じ申如く、土地の體相違無之候、後はつまり候へども、門前百間有之候、何かに福有の寺にて候、右兩樣の判よく考合申候故、護國寺護持院の出家中は、予を信仰にて候、

〔古今要覽稿姓氏〕草名吉凶

講習餘筆に花押のことを說て、さて其畫間の空穴の數にて、吉凶を云、其生の性に叶へりの叶はざるのと云る附會の說共をなせり、これらは陰陽占卜家のする所にて從べからず、